立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
企画研究プロジェクトＩ（教員・学生参加型）２０２４年度研究成果報告書

プロジェクト学生代表者	学科・学年	氏　名
	福祉学科・４年	須田　州
指導教員	所属･職名	氏　名
	コミュニティ福祉学部・教授	西田　恵子
研究課題	楢葉町から学ぶ地方コミュニティの再生とくらしを支える地域福祉の在り方	
研究年度	２０２４年度	
プロジェクト分担者	伊藤愛実・柏木桐生・加藤純也・木村結衣花 須田州・土屋さくら・根本拓実・萩原凛太朗	

プロジェクトの内容及び成果の概要

1.はじめに

本プロジェクトは、福島県の被災地域の地域福祉の実践について学び、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らすために必要な要素を考察することを目的として実施した。

2．内容

(1) フィールドワークの事前学習

双葉郡楢葉町の被災状況と地域資源の現状について既存資料の収集を通じて把握し、現地で重点的に学ぶべき課題を整理した。また、Zoom ミーティングを利用し、楢葉町社会福祉協議会と楢葉町在住の高齢者の方々と交流を図った。

(2)フィールドワーク

●地域包括支援センター職員から住民の孤立を防ぐための支援について学んだ。特に社会福祉協議会や地域包括支援センターが、社会福祉士・保健士・介護福祉士・ケアマネジャーといった専門職の専門性を活かし、地域福祉の実践を継続してきた意義深さを認識することができた。

●高齢者の地域サロンに参加し、住民と昼食作りやレクリエーションをともに行ったことで対話が広がり、日常的なつながりの重要性を実感した。また、サロン活動の維持には、思いのあるボランティアの協力が不可欠であることを学び、地域内外の人々が支え合う仕組みの重要性を再確認した。

●社会福祉法人の運営する事業所を訪問し、利用者にとって「居たい場所」のエピソードなどを聴き取った。

3．考察と学び

楢葉町でのフィールドワークを通じて、地域福祉の実践には「住民が無条件でいることのできる居場所づくり」が不可欠であると改めて認識した。震災後、多くの住民が「居場所」を求めており、サロン活動が単なる交流の場を超えて「生きがい」につながり、さらにコミュニティづくりにつながっていることがわかった。また、帰還後の高齢者支援や地域づくりに、社会福祉協議会や地域包括支援センターが専門職の知見を活かして実践を継続してきた意義とその必要を実感した。さらに、サロン活動を支えるボランティアの存在が地域住民のつながりを強化し、活動を持続可能なものにしていることも学んだ。一方で行政の施策が新たな住民の定着等の地域課題に必ずしもつながるわけではないことを実感した。専門職が地域住民と適度な距離を保ちながら関わることや、近隣地域との交流を促進する等の行政では対応しきれない問題に対処できる専門職の必要性を強くとらえた。

本フィールドワークを通じて現場のリアルな声に触れ、被災地の地域福祉の実践における課題と可能性について深く理解することができた。